

## 審査の結果の要旨

氏名 陳 景敦

本論文は、初期韓国近代建築の形成過程(開港期～植民地期)において西欧及び日本による様式主義建築の展開を含んで朝鮮伝統建築の変化様相を建築様式の視座から把握することを主要な目的としている。

第1部(第1章・第2章)では、欧米外国人による建築活動について首都漢城の貞洞一帯を中心にした公館及び住宅、そして1900年のパリ万国博覧会における「韓国館」の建築経緯が考察された。当時フランスの建築活動は、本国と上海の行政組織、そしてフランス公使館による複合的な構図下で行われ、パリ万博の韓国館を作り出した裏には朝鮮伝統建築に関するフランス側の植民地主義理念が反映されていたことが明らかにされた。

第2部(第3章・第4章)では、朝鮮人建築主体による建築活動について、国王高宗及び親米開化派政府によって行われた首都漢城近代化事業と独立門の建築過程が考察された。

第3部(第5章・第6章・第7章・第8章)では、植民地期の日本による建築活動について総督府官立建築(第5章)、官舎及び住宅(第6章)、鉄道駅舎建築(第7章)、そして博覧会展示館建築(第8章)の展開過程と様式的特性を中心に考察された。具体的には、5章では植民地期に前後して総督府建築組織によって行われた官立建築の流れ、6章では、日式官舎の展開過程に現れた「和洋鮮折衷建築」の主な特性と住宅改良事業における「和洋鮮折衷式」・「朝鮮風」住宅の主要な特性、7章では、鉄道建築に現れた朝鮮風駅舎建築について、8章では、総督府によって開かれた代表的な博覧会建築について、1915年の朝鮮物産共進会の会場配置に現れた「韓洋並存式」配置、1929年の朝鮮博覧会で展示会場の中心軸を成した展示館における「朝鮮様式」が考察される。

第4部(第9章・第10章)では、植民地期に活動した韓国人建築家について朴吉龍と朴東鎮を通じて考察される。朴吉龍の朝鮮伝統住宅に関する認識は、機能的かつ合理的な側面に置かれており、朝鮮伝統建築が持った価値を植民地朝

鮮の政治的かつ経済的状况に合わせて啓発しようとしていた。朴東鎮の朝鮮式住宅改良理念の特徴は、西洋に盲目的に従うのではなく朝鮮の伝統を継承する枠組みの中で朝鮮伝統建築の要素を装飾的、技巧的、技術的に活用して、韓洋折衷式の改良理念を表現することであった。

第5部(第11章・第12章・第13章)では、開港期～植民地期に活動した欧米宣教師によるミッション建築の展開について、フランスのパリ外邦伝教会、イギリス聖公会、そしてアメリカのプロテスタント(長老会・監理会)の建築活動を通じて考察された。

終章の結論では、上記の諸建築主体の折衷式建築に現れた多様な様式的概念及び設計理念についてまとめ、「折衷式建築」・「韓屋型建築」・「韓洋折衷建築」・「和洋鮮折衷建築」・「朝鮮風建築」・「朝鮮様式建築」など各主体の固有の設計理念によって造られたそれぞれ異なった建築型の様式的概念と意味を整理している。これはきわめて包括的な研究であり、こうした作業によって韓国近代建築の展開が総合的に位置づけられたのである。こうした論考は、韓国建築史研究に対する大きな貢献と考えられる。

よって本論文は博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる。